ちよう261（2016.5.27）

山鹿順子さんが語る「私のジャテック」

1967年に横須賀に入港した空母イントレピットから4人の米兵が脱走した。ベ平連が保護して国外に脱出させた。ここから日本におけるベトナム反戦米兵支援運動が始まる。

脱走兵士を国外に脱出させるまで、日本の市民がかくまう運動はジャテックと呼ばれた。関わった人たちは兵士の安全を確保するために、お互い連絡をとらず、記録も残さないという約束で、今も幻の組織といわれている。

横須賀にはジャテックとは別に、独自の反戦米兵支援運動があった。市民宣言運動の前身であるヨコスカ市民グループは、米兵支援の拠点づくりがきっかけで生まれた。ジャテック運動が停止した後も、横須賀の反戦米兵の支援運動は続いた。ベトナム帰還兵の会横須賀支部の組織的活動を、市民は支えた。

1974年には、前年に横須賀を母港とした空母ミッドウエイの乗組員による乗艦拒否闘争があったが、日本の反戦米兵支援運動の歴史発言には横須賀の運動は登場しない。横須賀の歴史をまとめようと横須賀の思っていたら、山鹿さんが、「私ジャテックでした」とびっくり発言。

4月13日、山鹿さんの「私のジャテック」を聞こうと、11人が集まった。

山鹿　最初にお断りしたいことがあります。半世紀も前のことですから、忘れてしまったことも多くて、記録もないし、どれだけ中身のあるお話ができるか不安です。それに私が関わったのは、ジャテック運動のほんの一部でしかないということもあります。でも、個人的にはとてもインパクトのある経験でした。ですから、話せるのは個人史的なことになってしまうと思います。

2007年に横須賀の運動に参加するようになって、事務所でたよりのバックナンバーを読んだりして、市民宣言運動が反戦米兵支援からスタートしていることを知りました。横須賀で活発に米兵支援運動が行われていたころには、すでにジャテックの運動は停止しています。私が関わったのも1970-71年ですから、もう終わったものと思っていたら、その後にも横須賀では続いていたんだと言うことを知ってびっくりしました。いつかそこをつなげなければいけないかなという思いがあったので、新倉さんが横須賀の反戦米兵運動をパンフにしたいと言われた時、それならば、その前段にあった、ほんの小さな個人的な経験でも役立つかなと思って、今日の会を引き受けました。

事務局は「句会」

最初にジャテックについて、簡単に振り返ってみます。ジャテックは反戦脱走米兵援助日本技

イントレピッドの4人

術委員会(Japan Technical Committee for Assistance to U.S. Anti-War Deserters)です。ちょっと硬い名称ですが、吉川勇一さんでしょうか、名づけ親は。

新倉　文献によれば武藤一羊さんらしいです。

山鹿　私たちは「じゃの字」と言っていました。1期から関わっているのは高橋武智さんという方です。1期はイントレピットの会からの続きで、小田実さん、吉川勇一さん、鶴見俊輔さんたちが表の顔でした。2期になると組織を新しくして、高橋武智さんが総責任者で、事務局は「句会」という暗号で呼ばれていました。

関連年表を作ってきましたが、ジャテック運動のスタートは、空母イントレピッドの水兵が脱走してベ平連に救助を求めてきたことにあります。それには、ベ平連があらかじめ米軍兵士に脱走を呼びかける活動をしてきたということがあります。

ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)知っていますか(笑)。知らない人が多いかも知れませんが、1965年4月24日に最初のデモがあったと年表にはあります。それで、その9月25日の4回目のデモで、第一土曜日にすると言うことが決まって、横須賀と同じように月例化になったようです。

66年12月10日には、横須賀基地前で米兵に英文反戦ビラの配付が行われています。立川や岩国でも、同じように米兵への働きかけがありました。こうした取り組みがあって、イントレピッドの兵士が、いろいろつてを探りながら、ベ平連にたどり着いたんだと思います。

米軍基地前でビラをまいた人たちは、その時実際に脱走兵士があらわれるとは思ってもいなかったみたいですが、ともかくなんとかしなくてはいけないと手を尽くして、ソ連経由で脱走兵をスエーデンに送りだすというコースができて、67年11月11日ソ連のバイカル号という定期便で、脱出が成功するわけです。

その頃すでに、ヨーロッパでは米軍基地からの脱走兵はたくさんいて、スエーデンは脱走兵を受け入れる準備ができていたそうです。

68年1月19日、空母エンタープライズが佐世保に入港して、ベ平連は船をチャーターして脱走を呼びかけます。

4月13日

新倉　今でも佐世保では、毎月19日に月例デモが行われています。48年続いていて、580回ぐらいになります。横須賀の大先輩。

山鹿　北海道からソ連経由でスエーデンに送り出すというのが、ジャテックの第1期の運動です。ベ平連には援助を求める米軍兵士がコンタクトをとってきて、その兵士をかくまいながら、日本から脱出することを支援するチーム作りが少しずつできていきます。イントレピッドの4人以後、68年4月22日までに、6名が根室港から出港して最終地スエーデンを目指しました。その次が9月2日。釧路港から4人。11月5日には2人いたんですが、そのうちの一人がスパイで途中で消えてしまって、脱走兵のメイヤーは逮捕されます。メイヤーは横須賀まで連れ戻され厳しい処遇を受けて、ハワイで軍事裁判にかけられます。

五月晴　根室からの船は合法的なもの?

山鹿　定期便でソ連側と話がついていたので合法ですね。ほかに漁船というのもありました。

新倉　オホーツク海では密漁が公然と行われていて、その密漁船にのせて、ソ連の監視船に移し替えたというのを読んだことがある。

山鹿　スパイが紛れ込んで、脱出ルートが使えなくなって、実質的に第1期のジャテック運動は終わります。第2期はがらりとメンバーを入れ替えて、兵士が泊まる場所もどういう問題が起こるか分からないからと、まったく新しい人たちによって担われます。

第1期では、法的な問題は良く分からなくて、脱走兵をかくまう日本人も違法行為だということで捕まるんじゃないかという心配がありました。実際には、脱走した米兵は地位協定9条2項で、米軍法上では違法ですが、日本の法律はなんら犯していないので、脱走兵に便宜を与えた日本人が逮捕されたり罰せられたりすることはないということが、はっきりしてきました。ただ米軍から警察に脱走兵の身柄を拘束するように要請があった場合は、兵士は捕まってしまう。通常ならば米軍兵士は入国管理法や外国人登録法の規制を受けないのでパスポートを持っていなくても問題はない。ただ第1期は脱走兵として受入れる国があったからパスポートがなくても入国ができましたが、第2期は脱走兵としてではなく、一民間人として入国するので、出国にも入国にもパスポートが必要でした。

第2期ジャテック

脱走ルートを失ってからも、保護を求める脱走米兵はいました。戦争には加担したくないという兵士たちからの連絡を断るわけにはいかない。だから保護・援助活動は、続けなくてはいけない。地下活動的な要素が強い第2期のジャテック運動が始まるわけです。脱走兵士をかくまう期間は週単位だったり、月単位だったりいろいろでした。その間兵士はひとりでは外出もできないという不自由な生活です。その一方で日本からの出口をどうするかという問題があり、それはこの武智さんの本に詳しく書かれていることですが、そのミッションを担ってヨーロッパに行き、いろんなつてをたよって、やっと協力者を見つけて、そこだけは完全に違法なことなんですが、その人から、パスポートの偽造技術を拾得するわけです。

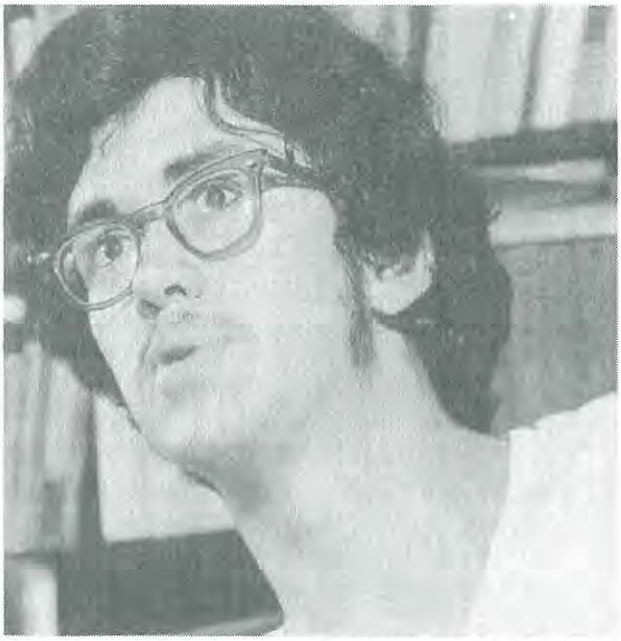
その間に、脱走兵をかくまっている人たちは、喧嘩する兵士や、暴れる兵士をなだめたり、いろいろ大変なこともあったようですが、私自身はそうした大変なことは経験してはいません。関わった人々は、動機も経験も、家族構成も皆さまざまでした。兵士をひきつぐ場合もお互いに偽名で、句会のメンバー以外は、ほとんど横のつながりはない状況でした。

2期のジャテック運動で最後に残った兵士は3人でした。そのうちの一人は基地に戻って、最後はふたり。そのうちの一人は2年間外に出られない生活をしていて、その兵士が武智さんが

作ってきた出口を使って日本から出ていく最初の脱走兵となったわけです。脱出を成功させるためには、いままで関わっていた人とは違う人間の手助けが必要となりました。リスクを避けるためです。兵士は一人で空港までいって、パスポートを見せて飛行機に乗らなければならない。でも、ずっと外に出ていなかったわけですから、ある種のリハビリというか、「しゃば」に慣れることが必要でした。その手伝いをする要員が私でした。

それが70年11月です。兵士の名前は来栖君。本名は今でも私は知りません。もう一人が神田君で、もちろん偽名ですが、彼が次の年の7月に日本を脱出します。ふたりはともに国外脱出に成功して、無事最初の目的地パリに着きました。

次に、なぜ私が、このミッションに関わることになったかをお話しします。その当時、早稲田大学には国際部という一種の交換留学生の受け皿のような部署があり（多分今もある）、主にアメリカの大学生、だいたい3年生だから20歳くらいの学生たちが1年間在学していました。私はそこで彼らの世話をしていました。その仕事を紹介してくれた人、私の前任者が鶴見良行さん（イントレピットの会の世話人のひとり）と友だちだったこともあって、ジャッテックに関わっていたんですが、



来栖（「私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた」社 2007より）

広島に行くことになって、「こういうのがあるんだけど、やらない」といわれて、このミッションに加わりました。

その時のチームは覚えているのは4人。武智さんがキャップで、最初詳しい説明・指示を受けました。城戸君という学生が連絡係でした。実際に動くのは私のほかにどこかの教会の牧師さんで、移動のために車を運転されたと思います。

来栖との10日間

最初に会ったのが鎌倉の家。そこに迎えに行きました。その前に、出口が決まったけれど、どうなるかわからない、あなた次第だという話をして、彼の意志を確認してあるということでした。

出発までに、2軒違う家に変わりました。私たちに託されたことは、出発までにすべき準備を手伝うということでした。そのひとつに、パスポートの写真が金髪で青い目だったので、髪の毛や目の色を合わせないといけない。彼は黒い髪に黒い瞳。芝居をしている人の所に連れて行き、金髪に染めようとしたんだけど、赤茶けた髪の毛にしかならなかった。目は眼鏡屋さんでブルーのコンタクトを買ったが、青い目にはならい。そこでブルーのセーターを着たら、その色が目に反射するのではないか、などいろいろ苦労した記憶があります。

彼はディスコに行きたいと言い出しました。私はそれまでディスコに行ったことがありませんでしたが、人に赤坂のMUGENがいいと言われ、そこに行きました。その時のことは鮮明に記憶に残っています。

大阪から出発することにしていたので、彼は一人で新幹線に乗って大阪まで行くことになっていました。私の仕事は切符を買い、出発の前日それを彼に渡して、改札を通る手順などを説明し、明日は頑張ってねというところまででしたが、次の日にこっそり東京駅までいって、無事に新幹線に乗ることを確認しました。

新倉　移動はひとりですか。

山鹿　ひとりです。大阪では誰かが、飛行機に乗り込むことを確認しています。

新倉　髪の毛は中途半端のまま。

山鹿　ええ（笑い）

服部翠　ディスコでは踊ったの?

山鹿　当時の私はまだ自己解放されてなくて、踊れなかった。彼はテキーラをクイッと飲んで。

新倉　来栖はジャテックにかくまわれている間に小説を書いたと資料にあるけど。

山鹿　文芸雑誌すばるに掲載されたけど、なぜか私は読んでいない。「われらが歓呼して仰いだ旗」というタイトルで、7回にわたって連載されたそうです。でもこれは未完に終わった。

新倉　山鹿さんは来栖と何日一緒にいたの。

山鹿　10日間だと思う。2週間はなかった。

新倉　どんな感じ。逃亡生活は長かったでしょ。

山鹿　彼は、若いけど随分できた人だった。長い間たいへんな思いをしてきたはずだけど、違和感なく街を歩いていた。

新倉　どんな話をしたんですか。

山鹿　それがほとんど覚えていない（笑）。じっくり座って話をきくという余裕はなかった。常に何か用事をしながら歩いていて、次はどこへ行く、ということだから、たわいもない話だったと思う。

新倉　10日間の多くは、飛び立つために必要なにかをしていると。

山鹿　そうね。それに私も仕事があったから、毎日ということではなかった。

新倉　その時彼はどこに住んでいたの。

山鹿　池袋かな、アパートだった。料理研究家かなにかで、家のかもいの上に調味料がズラッと並んでいた。

新倉　かくまっていた人とは接触しないの。

山鹿　その時はあいさつをして話もした。その方も英語はできたと思う。

新倉　山鹿さんが突然現れて怪しまないの。

山鹿　来栖とは最初に鎌倉で会って、池袋へ送っていた時に会っているから、それはない。

新倉　鎌倉のどこ。

山鹿　おそらく日高六郎さんの家。

新倉　小説を書いていたのは知っていた。

山鹿　知っていた。聞いていたので。でも、なぜすばる買わなかったんだろう（笑）。彼は本が好きで、前任者からは本の注文がいろいろあったと聞いている。ジェームス・ジョイスとか難しい本の注文が多かったって。

新倉　この資料によると、岸根野戦病院から脱走したとある。負傷兵の治療を通じてベトナム戦争の実相に触れ、ベトナム配属を機に68年暮れに脱走だから、ほんとに長い逃亡生活だった。

山鹿　2年ですね。

新倉　逃亡の疲れ、精神的なダメージ等は。

山鹿　来栖君に関してはそれは感じなかった。非常に優秀な青年だったんだと思う。後日談だけど、日本に10年程前に来ているんです。

新倉　もともとベトナムに送られるよりはと看護兵を志願した。それで岸根野戦病院なんだ。日本市民の呼び掛けはかなり行われていた場所。

偽造パスポート

新倉　山鹿さんは、そのときには脱走米兵をかくまうことは法的には問題はないことは知っていたんですか。

山鹿　知っていました。

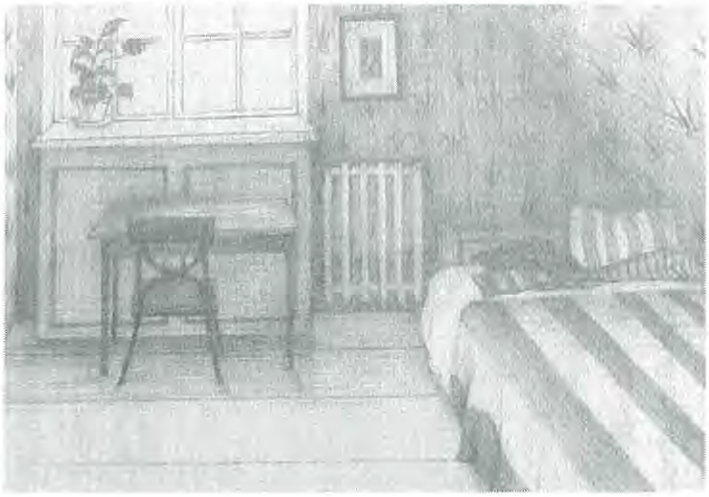
新倉　やばいことをしているという感覚は。

山鹿　なかったですね。

新倉　でも、偽造パスポートで出国することは知っていたんでしょ。

山鹿　ええ。来栖が捕まったら大変だということは分かっていました。でも、それを通り抜けなければ彼は自由になれないというのがあったから。そこは問題ではなかった。で、彼はパリにずいぶん長くいたんだけど、今はアメリカで暮らしていま

来栖がパリで住んでいた部屋（来栖のスケッチ）
（「となりに脱走兵がいた時代」思想の科学社 1998 より）



す。10何年か前に日本にきて会ったんだけど、スラッとした青年がでっぷりしたおじさんになっていて驚きました。アメリカに帰って随分苦労したんだけど、カーター大統領の恩赦があって、それで医者になりたくて、お金がないからメキシコだと安く勉強できるのでメキシコで医師の免許をとって、ルイジアナで結婚して子どもできてということでした。それでも、脱走したことは家族には話してはいなかったというのね。日本の市民が呼んでくれたのでこれを機会に、帰ったら家族にも話そうと思っていると言って帰りました。

新倉　ジャテックが脱走兵士を外に送りだすのは、来栖のあとの神田さんが最後。

山鹿　そうです。

新倉　来栖が潜んでいた場所、分かりますか。

山鹿　池袋のアパートですが、随分時間が経っているのでわからないでしょうね。

五月晴　神田さんとは面識はあるの。

山鹿　私は来栖君を送りだした後、すぐアメリカに行ったので、会っていません。神田君の送り出しは牧師さんや中原道子さんが担当しました。

新倉　前任者から声をかけられたということですが、どう言う気持ちで引き受けたんですか。

山鹿　どう言ったらいいんだろう。割合気軽に分かりましたと言ったと思います。考えさせてくださいとかは言わなかった。

話はちょっとそれますが、早稲田にくるアメリカの学生は年ごとに変わるんだけど、毎年約25人の学生を4年間面倒を見ていたんだけど、一年ごとに学生の感じが変わってきました。主に中産階級の学生でしたが、最初の年（1967年）の学生は早稲田のキャンパスに立っていた立看を見て、理解できないという感じでした。「米帝」なんて言葉があったでしょ。すごく防衛的になって。だけど毎年少しずつ変わってきて、私の最後の年に世話した学生の中には外人べ平連のデモにも参加した人もいました。アメリカではオハイオ州立ケント大学でのベトナム反戦集会で警察による銃撃事件があって（1970年5月）、4人の学生が死亡。それでクラスの授業をボイコットするということを言いに来た学生もいたし、沖縄でボランティアをしたいという学生もいました（実際にはPCSの仕事として）。そういう時代にそういう学生を相手にしていたから、違和感なく受け入れたんだと思います。

中井　早稲田での山鹿さんのお仕事は。

山鹿　母親のような、お姉さんのような。学生はまだ20才でしょ。私と10ぐらいしか違わないんだけど、日本にいる間のホストファミリーを探して、マッチングをして、そこにお願いをして、問題があったら駆けつけるというような仕事です。夜中に新宿警察署から呼び出しの電話がきたこともある。新宿の街を歩いていて、警察官に呼び止められたけど、外人登録証を持っていなかったので、保証人として引き取りに来いと言われて。ほぼ24時間の仕事と思っていました。

中井　職員ですか。

山鹿　一応、肩書は嘱託。アメリカ中西部の12の私立大学の連盟があって、学生はそこから送りだされてきて、早稲田の国際部が受け入れていました。雇用主は連盟の日本プログラム幹事校です。（次回に続く）

「たより」262（2018.6.20）

山鹿順子さんが語る「私のジャテック」

その2

脱走兵、世界で33,000人

山鹿　兵士運動では「ヤンキー・ゴーホーム」ではなくて、「GIs・ジョイン・アス」という言い方をしていました。横須賀に来て、市民宣言の運動にはそうした思想性があって、嬉しかったですね。

新倉　「たより」の前のニュースレターは「じょいんあす」でした。

友　山鹿さんは、最後のふたりのうちの一人をサポートしたということだけど、日本から何人ぐらいの兵士が脱出したの。

山鹿　それがいろいろ調べたんだけど、正確な数は分かりません。これは先にもざっと述べたことですが（前号）、まず1967年10月にイントレピット号から脱走の水兵が4人援助を求めてきて、彼らが日本からソ連経由で脱出したのが同年11月11日。その後いわゆる第1期ではベ平連に援助を求めてきた兵士は1968年4月に6名が根室から脱出。6月に3人、9月に4人それぞれ根室から脱出したようです。ところが11月に脱出を目指して北海道に向かった2人のうちのひとりがスパイでこのルートが断たれました。第1期中は13人、第2期では2年後に2人。合計で19人です。でもこの他に援助を求めてきたけど、途中で帰隊した人、あるいはベ平連以外でなんらかの方途で脱出した人がいたかもしれません。日本からの脱出者数は分からないんですが、インターネットで調べたら、ベトナム戦争時の世界中の脱走兵は、1971年で33,094人。

平　すごい数だね。

山鹿　総兵力の3.4%です。

中井　脱走した米兵は、なぜ危険を冒してまで日本を出ようとしたんですか。

山鹿　日本に居ることは、彼らにはとても危険なことでした。逃亡生活も長期になっています。でもジャテックの第2期の運動では第1期のソ連のように脱出を支援してくれる国がなかった。だから、出国するためには違法な方法をとらざるをえなかった。日本にいる限り彼らには自由はなかったし、支援する側にも限界はあったと思います。

新倉　それにしても、偽造パスポートで出国するというのは、思い切った方法だよね。

中井　すごい賭けですよね。私だったら、心配だから5年ぐらいここに居たらと思ってしまう。

山鹿　もちろん危険な方法だということは覚悟していたと思います。

中井　でも、そっちに賭けると。

千尋　もうすでに、十分賭けているからね。

夏樹　だから、もう賭けた方に行くしかない。

山鹿　ほかに方法はなかったと思います。

1971.4.15発行

新倉　ベトナム戦争時の米兵の脱走は、個々人の思いを超えた選択としてあったように思う。

山鹿　そうですね。それで、戦争したくないと逃げてきた人の命を預かっているという思いが、「句会」（第2期世話人会）の人たちにはあって。

中井　山鹿さんは不安じゃなかったですか。

山鹿　不安はなかったとはいえませんが、私は成功を疑わなかったですね。

新倉　脱走の他に良心的兵役拒否という方法もあった。横須賀でも取りくんでいたが、実際の権利取得はハードルが高かくて、誰でもできるものではなかったと聞いている。

千尋　偽造パスポートをなぜ本人の写真で作らなかったの。

山鹿　これは私の記憶違いで、前号で話した部分に誤りがありました。「パスポートの写真が金髪で青い目だったので、髪の毛や目の色を合わせないといけない」ではなく、パスポートの写真は来栖本人のもので、パスポートの中に身体的特徴を（肌、目、毛の色など）記載する項目があるようです。日本人は大半が黒い髪に黒い瞳なので日本のパスポートにはない項目です。それが「金髪で青い目」になっていたということです。

ここで大事なことは、その写真に偽造ができないようにパスポート発行機関の特殊な押印があり、そこにアーティストの役割があるわけです。ヨーロッパは歴史的にも長いさまざまな闘争の地下活動の経験があって、それを教えてくれる人を高橋武智さんが見つけて、そこからその技術を学んだわけ。でも実際に偽造技術を教える人と偽造するアーティストとは違って。たくさんの人の手を経て偽造パスポートは作られた。

来栖はそうした人々の助けを得て、空港の出国手続きをパスしたのです。

GIs・ジョイン・アス

平　先程山鹿さんが、「ヤンキー・ゴーホーム」ではなく「GIs・ジョイン・アス」と言われました。これは重要なことなんだけども、私はもともとは「ヤンキー・ゴーホーム」派で、「ジョイン・アス」はまったく頭になかった。最初から「ジョイン・アス」と言えたのは、どういうことなんですか。

友　それは新倉さんが答えたら。

新倉　そんなに難しく考えたわけではない。ベトナム戦争を止めさせようと思ったら、兵士に働きかけるのは当然だし、なにより具体的でしょ。

五月晴　来栖たちをかくまう費用は。

山鹿　日本の市民のカンパです。

新倉　お金集めは別の専門のチームがあったんですか。

山鹿　おそらくあったと思うけど、具体的なことは分かりません。とにかくいろんな係の人がいまし

た。車を提供する人。運転をする人。隠れる家を探す人。家を提供する人。各地にベ平連があって、運動が広がっていたということだと思います。

平　脱走兵士の思想的な考え方はどうでしたか。人道的に人を殺すことはできないとか、宗教的なことがあるとか。

山鹿　私が直接接触したのは一人だけだから、こうだとは言えないけれど、様々な思いがあったんじゃないでしょうか。ともかく殺すのが嫌だとか…。

新倉　ごく普通の若者の行為だったことが特徴かもしれない。特別高い教育を受けてきた若者ではなくて。その彼らが自分の言葉でベトナム戦争は間違っていると語り、戦いたくないと脱走した。そこにみんな驚いた。

ジャテック後の運動

平　第1期のジャテック運動と第2期の終盤には、運動的な断絶があったということですが。

山鹿　「断絶」という言葉は適切ではないかもしれない。第2期の運動の出口がないという状況の中で、アメリカからPCS（パシフィック・カウンセリング・サービス）の活動家が来て、脱走ではなく軍隊に残って合法的に反戦活動をする兵士をサポートするという方針が示されました。そのためには、基地周辺での活動が必要ではないかということで、ある時期運動の方向転換という真剣な話し合いがありました。そうした経緯もあって、横須賀もそうですが、沖縄、岩国、三沢等の米軍基地で、日本の若者たちも一緒に活動に加わって、ジャテック後の反戦米兵支援運動に移行していったんだと思います。私はたまたまPCSのシッドさんにも会っていています。

新倉　シッドはどこを拠点に活動していたんですか。

山鹿　ベ平連の事務所の中に連絡先があったと思います。

新倉　それは外国人ベ平連ではなくて。

山鹿　違いますね。独立した活動だった。たしか、PCSってサンフランシスコに拠点があって、日本のリーダーがシッドだったと思う。

新倉　シッドはオルグに来たの。

山鹿　私の世話をしていた学生のひとりにルースという女子学生がすでにオルグられていた。あとエドという学生もいたんだけど、彼も岩国にいっていました。ルースが1学期沖縄で働きたい。それは「日本人とアメリカ人の文化交流にとても役立つ仕事で、彼女にとっても有益な経験になる」。許可が欲しいということで、その仕事の説明と説得にシッドもついてきたのです。私の立場は管理者だったので、ちょっと微妙でした。

新倉　PCSは、僕らの理解ではキリスト教関係の資金援助組織で、ベトナム戦争に引っ張られた息子たちの親が、子どもが無事に帰ってくることを願って活動費を寄付した。その資金を使っていろいろな団体の活動家や弁護士、カウンセラーが横須賀にも来て、兵士の反戦活動を支えた。それが72年。その2年前に、東京で山鹿さんがPCSの活動家に会っていたわけですね。

反戦米兵運動の拠点「YOKOSUKA DAVID」。
仕事帰りの多くの兵士たちが立ち寄った。（73年頃）
2階のPCSのオフィスは、現在「市民宣言運動」の事務所。

第2期ジャテックの活動と入れ替わるようにして、全国各地でPCSに支援された、反戦米兵支援活動は始まっている。岩国、三沢、そして横須賀。ベトナム戦争の帰還兵が反戦組織（VVAW／WSO、ベトナム帰還兵の会）を作って活動するようになって、さらに運動は変化をする。横須賀にも支部が作られ、兵士は支援される側から、自ら運動を担う主体になっていった。そこで生まれたのが1974年6月のミッドウエイ乗艦拒否闘争。兵士が主体となって闘われた運動だった。

五月晴　脱走ではなく、（わざと）乗り遅れたと、空母が出港した後に基地に戻ったんだよね。

新倉　脱走よりはリスクは少ないと考えた戦術でした。

山鹿　それはまさに軍隊内での抵抗ですね。

平　そうした運動が下火になった理由は。

新倉　日本各地の反戦米兵運動をPCSの資金は支えたんだけど、ベトナム戦争が終結を迎える段階になって資金が集まらなくなり、日本へスタッフを送りだすこともできなくなった。横須賀には、岩国で脱走した反戦兵士ノーム・ユーイングがVVAWのスタッフとして派遣されたが、1975年9月に沖縄にむかった。その年の12月にVVAW横須賀支部は閉鎖。日本における組織的な米兵支援運動は幕を閉じる。今日は山鹿さんの話だから、そのへんのことはまた改めて。

山鹿順子さん

追記●インタビューを終えて

長い時を経て、細かい記憶はほとんどなくなり、また最初にお断りしたように、私が関わったのは大きなジャテック運動のほんのわずかな断片でしかなかったので、話し終えてちょっとこんなもんではなかった、もっと伝えるべきことがあったはずだという気がします。あのベトナム戦争という大きな時代のうねりの中で、人を「殺す」戦争を拒否して脱走してきた若いアメリカの兵士を、日本人も無関係ではいられないと、大勢の人をさまざまな形で動かしたダイナミックな運動だったと思います。

わずかな断片でしかなかったにしても、それに関われたことは私にとってひじょうに大きなインパクトのある経験でした。それを十分伝えきれないことが歯がゆいです。

10才で敗戦。その前の集団疎開でのいじめや、戦争をめぐる大人の態度に人間不信と自己否定による、10代の半ばから入り込んだ人生の暗いトンネルからいまだ抜け出せずにあがいていた時でした。そんな自分に反して、20才という若さで戦争を拒否し、他国にいながら軍隊から脱走し、いつ出られるかわからない地下生活に耐え、ついに自由を得て文字通り空を飛んでいった来栖君を見送った時の感激は、今でも忘れられません。そのような意味でジャテックは、私にとって極めて個人的な体験かもしれません。私だけではなく、様々な形で関わった人たちも、それぞれ意味ある体験をしたはずです。

横須賀で、思いがけず「脱走兵援助運動に再開」し、糸の切れたタコが舞い降りた地には（仕事を辞めてこれからどうしようと思ったときに使った表現）、それなりの理由があったのだと納得！（山鹿）